

IV-23

景観デザイン形成の要因分析

正会員 三浦行政

1. はじめに

景観デザインの特徴を認識する手段として、形成に係わる要因を分析することで、理解するのに役立つのを目的とする。

2. 景観デザインの成り立ち

デザインに際して、もののかたちを描くのに線が規則で具象的なものと、それに反して線が不規則な抽象的なものとに分かれる（図-1参照）。

これらの感覚が混在する中間的存在に景観デザインが位置すると考える（図-2参照）。

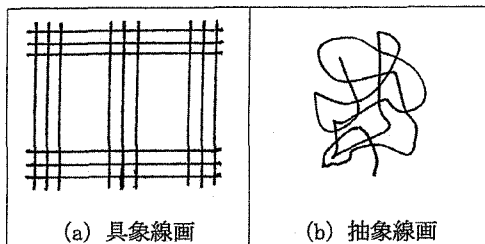


図-1 デザインのイメージ線画例

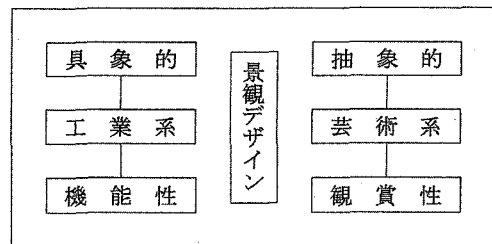


図-2 景観デザインの位置付け

デザインには共通するアイデアが存在し、これを応用し流行する傾向がある。

3. 場所での適応性

形式の豊富なものは選択の範囲が広く、場所との整合性が取れ、景観デザインの主要因となっている。その一つに、コンクリート拱橋（アーチ）の場合を取り上げる（図-3）に示す。

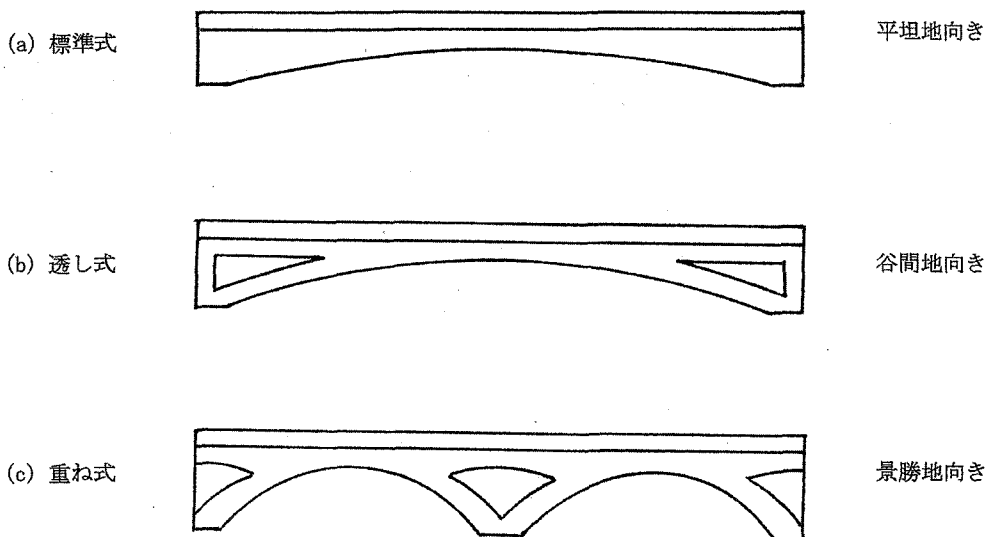


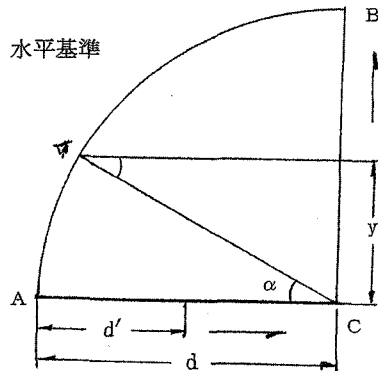
図-3 拱橋（アーチ）型式別適用地比較

4. 床版：見掛けの長さ

平面は見る角度に因り、長さの変化する程度を床版を引合いに、図式解法で求める（図－4）。

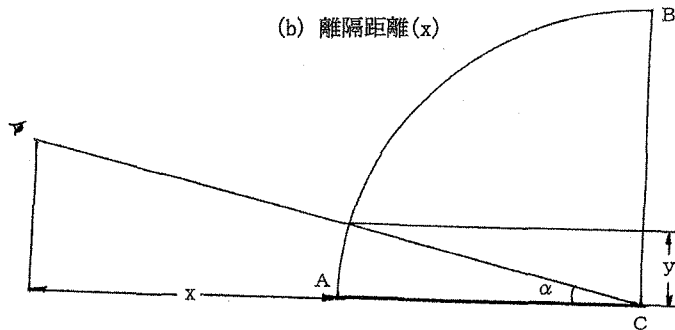
算式では、 $y = d \sin \alpha$ 記号は図式を援用する。

- α : 視点の角度 30°
 d : 床版の実際の長さ 1.0
 y : 算出された見掛けの長さ 0.5
 d' : 床版の見掛けの長さ 0.5
 A : d' の起点
 B : y の終点
 C : y の起点、 d' の終点



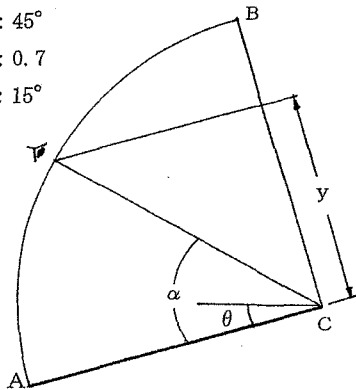
- $\alpha : 15^\circ$
 $y : 0.25$
 $x = d$

(b) 離隔距離(x)



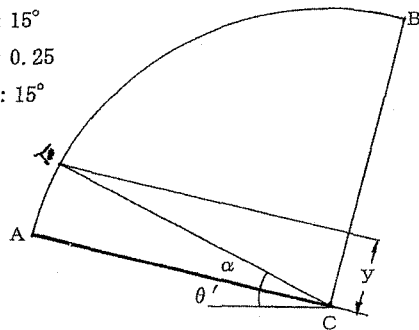
(c) 上り勾配(θ)左回転

- $\alpha : 45^\circ$
 $y : 0.7$
 $\theta : 15^\circ$



(d) 下り勾配(θ')右回転

- $\alpha : 15^\circ$
 $y : 0.25$
 $\theta' : 15^\circ$



図－4 直角並行転換法測面図

(b)、(c)、(d)、の d 、 d' は省略

5. 考 察

平面の見掛けの長さと同様に、立面の幅においても図式を適用できるが、平面の連続性に対し、立面は不連続性であるので図－4の(b) 離隔距離は係わりがないといえる。

6. 結 論

構造物については、場所と合ったものを設置することで、合理性の原理が働き、デザイン効果が得られる。ものの形状現象を観察することは、景観デザインの基本要因といえる。